

経済学博士竹中靖一君の「石門心學の經濟思想」に対する授賞審査要旨

一一一

本書の構成は大別して三編より成る。第一編序説には石門心学の性格と源流、石田梅岩の哲学思想を論じ、第二編総論には石門心学の社会的基盤、町人意識と石門心学の関連、心学の經濟思想を説き、第三編各論には石田梅岩を始めとして、手島堵庵その他門下の經濟思想を検討している。このほかに緒論（全篇の要旨）と結論とがある。

第一編第一章石門心学の学問的性格において、心学は「町人のために、町人の手によつて、町人の体験から、町人の道を説いた実践哲学である。支配階級の教養のための学問でもなく、幕藩体制の政策を基礎づける理論でもなく、封建領主の領民統治のための政策論でもなかつたところに石門心学の本領がある」と論じ、さらに梅岩が自己の体験に基づいて、その学問的見解を確立し、それを実践に結びつけた態度を明らかにし、石門心学の学問的性格の一面は、生の哲学であるとともに、行の哲学であるとしている。このように生活の体験から生まれた梅岩の学問は、道話という新しい形式の下に町人大衆のうちへ滲透して行つたのである。

第二章石門心学の源流においては、梅岩の思想の源流が神儒仏のすべてにわたり、さらに老荘にまで及んでおり、三教止揚の立場にあることを詳細に論述している。

第三章石門心学の哲学思想は、梅岩の哲学を克明に検討したものである。彼は宋儒の天人一体の世界観に導かれ、老荘や禅の境地にも入つて開悟したが、その体験は主観をはなれて客観に徹したものであつた。その立場から彼は「心」を深く洞察して独自の人間観と社会観を樹立し、それを実践的に人倫の道に即して説いたが、後に心学の称呼

が生まれ、「我なし」の伝統ができたのは、このような哲学に基づくものであるから、梅岩の哲学を前提としなければ、石門心学を真に理解することはできないとしている。

第二編第一章は石門心学の社会基盤と題し、まず中世末期から近世へかけての商業の発展と町人社会の形成過程を述べたのち、寛文から元祿にかけて、町人社会は幕初以来の特権商人から問屋や両替屋を中心とした新興商人の手へ主導権が移つていたことを説き、元祿期に繁栄した町人も、享保の改革で深刻な試練をうけたとしている。この時期に石田梅岩が町人の立場から、商工を「市井の臣」として町人道を説いたことは新興商人の精神的自覚を促したものであり、そこに心学発足の意義があるとしている。その後田沼時代から寛政期へかけて経済的繁栄と社会不安があらわれ、心学は最盛期を迎え、社会教化運動として発展したが、化政期以後幕藩体制の爛熟とともに、心学も領主の教化政策の一翼を担う御用機関と化し、衰退するに至つた。

第二章町人意識と石門心学においては、まず近世町人の性格を明らかにしている。和辻哲郎氏は冒険的企業家、近世文化の創造者、大尺型の町人、守銭奴型の町人、本来的町人の五型態を挙げ、本来的町人は前四者の型がもつ性格をすべて止揚したものであるが、その本来的な町人意識は著者によれば元祿享保のころに至つて確立したものである。町家の家法・家訓は町人意識の結晶ともいうべきものであるが、それには奉公意識・分限意識・家業尊重・儉約主義など梅岩が基礎づけた本来的な町人のあり方が示されている。さらに梅岩と同時代の『町人考見録』（三井高房著）を検討し、元祿五年の『町人袋』（西川如見著）は梅岩の思想体系の先駆形態をなすものとしている。

第三章と第四章とで著者は石門心学の経済思想を概観している。そのうち第三章では町人存立の社会的意義と町人

道を説いている。

農本商末は当時一般の思想であつたが、梅岩は商工を市井の臣とし「商人の売買するは天下の相^{なかり}」であるとして、商人存立の意義を高く評価している。商人の利は武士の祿と同じであり、価格の変動は「天のなす所」であるから、公正な取引こそ商人の道である。この町人道を自覚せしめるため町人教化の必要を痛感し、正直の徳を儉約と関係して説明し、さらに知足安分の道を説いた。

このように梅岩が町人存立の社会的意義と町人道を強調したのに対して、手島堵庵以後の心学はこの部分が後退し、むしろ封建制を謳歌するような色彩がよくなつた。第四章ではこのような祖述者の思想に焦点をあわせて経済生活の倫理、すなわち経済道を検討している。金銀財宝はあくまで生活の手段である。私心私慾を捨ててその公共性を考えなければならぬ。各人が「我なし」の境地に入るとき、「売つてよろこび買つてよろこぶ」経済社会本来の姿があらわれる。この感恩報謝の心こそ人を儉約に向かわしめ、知足安分の世界が開け、各人が互に和合するばかりでなく、上下の和合、家の和合が実現する。これ堵庵以下の祖述者が家や庶民を対象として庶民道徳の実践を説き、自ら「民の心学」とよんだゆえんであるが、このような思想が封建体制下の為政者に利用されやすかつたことも事実である。

第三編各論では始祖梅岩をはじめとして代表的後継者七人について、その閥歴・哲学及び経済思想が論ぜられ、その思想的特色が明らかにされている。特に梅岩については詳細な伝記がその思想形成に即して記述され、その体験と思想の関係が示され、教化活動の進展に及んでいる。手島堵庵は師説を平易化して教化発展の大勢をきづきあげた功

勞者であり、中澤道二は道話の完成者であり、また大名の間にまで心学を滲透させた人で、以上三人は心学思想史上特に注目すべき者である。鎌田一窓は老莊風の特異な思想をもち、布施松翁も多分に老莊風な思想をもつていた。脇坂義堂の数多い著書は「書かれた道話」の感があり、柴田鳩翁と奥田頼杖は後期の教化運動に活躍した代表者として注目されるべきものである。

結論において著者は次のように述べている。そもそも梅岩が心学道話を開いたのは町人の社会的職分を認め、町人が武家と同様な道義的自覚をもつべきであることを痛感したためであつた。梅岩は道義のまゝに人間は平等であると強調したが、道義の根本は正直にあるとし、それは具体的に日常生活の上では儉約となる。商人の間では一般に「始末^{しまつ}」という言葉で呼んでいるが、始末は始めと終りのバランスをとるといふ経済的合理主義に外ならない。

元祿享保期における商業社会の形成とともに各人は交換関係によつて結ばれることとなり、ここに一対一の万人対等の関係が成立した。梅岩もこの関係を認め、商取引本来の姿がそこにあることを説いている。この心学思想の底に流れている人道主義的な考え方は祖述者の間にながく伝わつた。

石門心学の特色は、経済生活と道義の関連がきわめて町人的な角度から考えられていることである。これ心学が「町人の哲学」とよばれるゆえんであるが、その思想の中に経済的合理主義、万人対等の人間関係が見出されることから、多少とも近代的市民社会に通ずる思想的契機が心学思想の底流のうちに見出されるのであつて、いわゆる近代化の一前提が形成されているとも考えることができる。しかしそれだけでは近代化社会は実現するものではない。始末という経済的合理主義も万人対等の意識も、幕藩体制の現実を肯定しながら、主として町人社会の内部についての

み考えられたのであり、家業世襲の尊重があり、身分制度の解放が行なわれず、職業選択の自由もないのであるから、近代的市民社会は成立し得ない。殊に後期になると封建権力の支配を強化するための具に供せられる傾向があつたことも見落してはならない。要するに一対一の間関係は商業社会の内部に一応は成立したものの、封建的な社会関係に圧倒せられたため、心学思想のうちに近代化の萌芽を宿しながら、成熟するには至らなかつたものと論断している。

本書は心学に関する多くの原典と従来の心学研究のあらゆる文献とを渉獵しつくして、広い視野と新しい立場から心学思想を全面的に究明したものであつて、従来教育史または道徳思想史の立場から取扱われていた心学は、ここに経済思想史上における地位を確立するに至つたものといふことができる。著者の研究方法は心学者の思想の中から経済思想を抜き出したのではなく、その根底となつた思想に即して理解し、同時に時代的な環境を深く考慮して論述しているのであつて、西洋哲学の概念を無雑作に心学思想にあてはめるごときことを厳に戒めている。著者が前後二十年にわたつてこの研究に没頭し、本書を大成した業績は高く評価さるべきである。